

「私の保育のはじまり」

——あたらしく入って来た子どもたちをめぐって——

石川章子

保育のはじまり。まさに私の場合は保育のスタートであ

る。幼稚園をかわり、新しい環境での四月。しかも四歳児を担任。入園に期待を持ちつつも大きな不安や心細さを隠しきれない子どもたちと同じように、私も実際の保育が始まるまで、意欲と不安の入り混った何とも複雑な心境の日々だった。しかしそれだけに子どもとの出会いの第一歩である入園式以来、今までにないすがすがしさというか新鮮な気分を感じている自分に気がついた。

「さと子ちゃん早く来たのね。一番よ」「すぐお友だちも来るからね」「もつとくるの?」「そうよ、ここに全部お友だちがすわるのよ」私と同じように、「どんな子が来るのかな」と振り返ってはどンドン登園して来る友だちを見ている子どもたち。「よーし一緒に頑張らなくては」とファイトが湧いて

きた。

◇入園当初のあそび

広い保育室に入って、まざままごとや積み木などの遊具に目を向ける子ども、知らない友だちに目を向ける子ども、教師に目を向ける子どもがあるとと思う。遊具に目を向けた子どもたちは、何も言わなくても遊びはじめ。だれが一緒にやるうともおかまいなしに、自分は自分でやり始める。友だちや教師に目を向けている子どもたちは何となく、オドオドしている。特に「何をするんだらう」「何が始まるのだらう」と教師ばかり見ている子どもは、手をつなぎに来たり、声を出したりすることもなくジツとしている。そして時には泣いて寂しさを訴える。友だちや、そのあそびに目を向けている

子どもたちは、他の子どもたちが案外平気そうに遊んでいるのを見て、だんだんと幼稚園という場に慣れていくのだと思う。だから、やさしいことばかけや気を紛らわすような話も必要だとは思いますが、むやみに抱いたり、なだめたりご機嫌をとったりしなくても、乱暴なようでも、こういう子どもたち
に幼稚園というものを見せてしまうことが大事ではないかと思う。しかしそれが「つまらない幼稚園」ではなく「おもしろい、楽しい幼稚園」であるようにしていかななくてはならない。

(1) ままごと

まずごちそうせめである。「先生ごはん」「はいジュース」「はいバナナ」と次から次へと持って来てくれる。「ごはんたべたからねよ」とゴザを敷いて寝る子どもがいた。「先生もおなかいっぱいになったから寝ようかな」と何の気なしに言い、実際に横になると、ままごとをしていた子どもたちは喜び、それを見ていた子ども、へやの隅から教師の行動を見張っていた子どもたちはびっくりしたようだった。そして、ありったけのゴザを敷きつめ、みんな寝てしまったのである。これには私の方がびっくりしてしまった。おかあさんは寝てくれないが、「先生は寝ちゃった」のである。「ボクも

寝てみよう」という気持ちになったのかもしれない。良いことにしろ悪いことにしろ「先生とは大変なものだ」とあらためて思った。

ままごとでも、砂場でのあそびでも、「先生、おとし穴に入って」「先生トンネルやって」と「先生」「先生」の連発。とてもモテる時期である。しかし「モテるな」と喜んではいられない。「先生」と来た子どもに対して、「ごちそうさま。おいしかったわ」とか「ずい分高い山ね」など一方通行で終らせるのではなく、「あらお砂糖入ってるのかしら?」とか、「今度は○○ちゃん穴に入ってみてよ」と返してやること。またその子どもだけに返すのでなく、他の子どもにも渡すことによつて教師対子どもばかりでもなく、子ども対子ども、となつていくようにしていかななくてはならないと思う。

(2) 絵をかく

自分専用のはさみ、クレヨン、ひき出しを持ってたうれしさがはじめはあると思う。クレヨンは使った後、きちんと並べて大事そうにしまいに行く。このうれしさと、何かに夢中になつていことができる安心感からか、何枚も何枚も絵をかき子どもがいる。「絵、かいていい」「紙ちょうだい」と言う子どものほかに、「先生、クレヨンで遊んでもいい?」とい

う子どもがいた。「どうやって遊ぶの」と聞きたいのをがまんして「いいわよ」と言うと、クレヨンを出してきて「先生紙は」と言う。何のことはない。絵をかくのである。しかし大人にとっては絵をかくことが目的であるかもしれないが、子どもにとってはまさにこの子どもが言うように「クレヨンで遊ぶ」ことが目的なのかもしれないと思った。

(3) あたりまえのこと

庭に出てかけ回った。バタバタと子どもたちが転ぶ。よくまわりを見ないから、足がまだ幼ないからだけではないと思う。もう一ついくら列になって歩かせてみようとしても、どうしてもはみ出て来てしまう。どちらも「はじめだから仕方がないこと」ではあるが、なぜ仕方ないのかを考えてみると、原因は教師にあるのではないかと思う。「先生何を言うのかな」「どこへ行くのかな」という時期であるから、子どもたちはいつも教師を見ているのである。「ころばないようになね」とか「お友だちのうしろから来るのよ」といくら言っても、教師の顔を見ている（つまり上を向いている）ので、まわりに目が行かず、転ぶし、前の友だちを無視して先生について歩いて来てしまうのではないかと思う。私は入園当初はあたりまえのことでも、ちゃんと口に出して言ってやらな

くてはならないと思っている。たとえば「手をつないで行こうね」といくら言っても離してしまう子どもがいる。あたりまえであるが、「手をはなしちゃだめよ」と一言いうと、「もうはなしでもいいわよ」と言うまでつないでいる。また、「お友だちのうしろから来るのよ」といくら言っても列は乱れるが、前にいる友だちの肩をたたかせ、「前の人の背中を見て歩くのよ」とくり返していくうちに、列になって歩けるようになってきた。四歳児といると、手をつなぐ＝手をはなさない。うしろ＝前の人の背中、というようにあたりまえだと思っていることは、意味を考えさせられてしまう。

(4) アイスクリームづくり

紙しばいを見ている時、「先生のどかわいた」と立ち上った子どもがいた。ここで「水飲んできていいわよ」と言うのと、みんな行きそうな気がしたので、「じゃあ先生がアイスクリーム食べさせてあげるわ」とすわらせた。「ゆうちゃんのみきサー車」（こどものとも）の話から、「みんなの手でコップをつくってごらん」と片手を器にさせる。「そこにつめたーい氷を入れるの」「次には牛乳を入れてかき混ぜて……」と手まねをする。子どもたちは真剣な顔をしてまねをする。「次にたまごを入れてかき混ぜて……」「はちみつを入れ

てまたかきまぜて……」「ちょっとなめてごらん」と指を浸してなめてみる。子どもたちも一緒に指をなめてみる。「甘い?」「うん」「もう少し入れようか」「うん」とくり返す。この頃になるとだんだんわかかってきたらしくニコニコしてくる。「次はえーとイチゴを入れようかな」「バナナがいい」「みかんがいい」など答えてくれる。「じゃあバナナを入れてかきまぜて……」そしてソフトクリームのように山盛りにして食べるのである。これは五歳児にやってみても通用しない。不思議と四歳児入園当初はみんな喜んでまねをする。「ねー先生またアイスクリームやって」と遊んだ後などよく言う。「出して引っこめて」という手あそびよりもおもしろ味があると思う。

◇またあしたも

入園式の時、ハンカチをかみしめて泣いていた子どもが、ごみ箱にボールを投げ入れるあそびを発見し何度もくり返すのを見たり、積み木を高く積み上げては倒し歓声をあげていた子どもが、「先生、テレビいっぱいできたよ」「どーれ」「こがニュースのテレビ、こが天気予報のテレビ、こがマンガのテレビ、こが野球のテレビ……」と一つひとつ

顔をのぞかせて説明する姿を見て、「変っていくな、動きはじめたな」と私の方もわくわくしてくる。そして、「先生さようなら、またあしたも来るからね」「あしたこの汽車に乗ってね」という子どもたちのことば。「先生あした電車が動かなかつたらお休みするかもしれないわ」と言う。「じゃあボクたちどうすれば良いの」と心配そうに言う子どもの顔。「今日はたけしにアイスクリームの作り方を教わりました。大人しく、幼稚園になじめるかと思っていた子が作ってくれとせがむので、言う通りに作りました。何とも奇妙な飲み物ができ上りました」という母親からの知らせ。これに「またあしたも頑張ろう」とファイトを燃やす私。環境が新しく子どもが新しい。それだけではなく（それだからこそ?）何か自分が今までとはちがったような気がする。

まだスタートしたばかり。ゴールまで続くだろうか。

(文京区立汐見幼稚園)